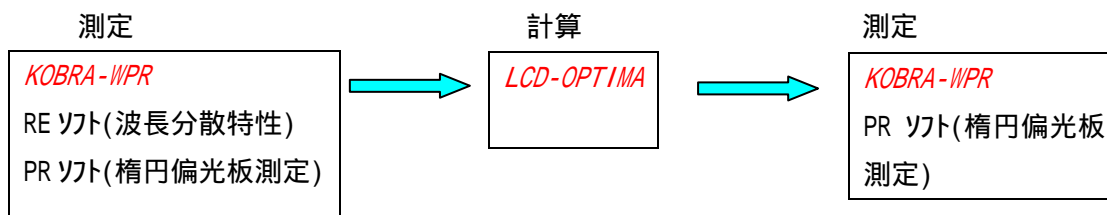


## 11. STN 切を PC 位相差板 2 枚で補償する実験



手順;

PR ソフトのメニュー 1. 楕円偏光板測定を使用して、偏光板+STN 切を固定試料台に偏光板を下側にして置き、楕円偏光状態を測定します。

このとき、必ず測定波長を 5 つ指定し、**ストークスパラメータ表示をあり**に選択します。

LCD-OPTIMA に の測定データを読み込み、例えば位相差板 2 枚(ここでは PC を仮定)の条件を次のように設定します。( PC の波長分散曲線は予め調べておきます)

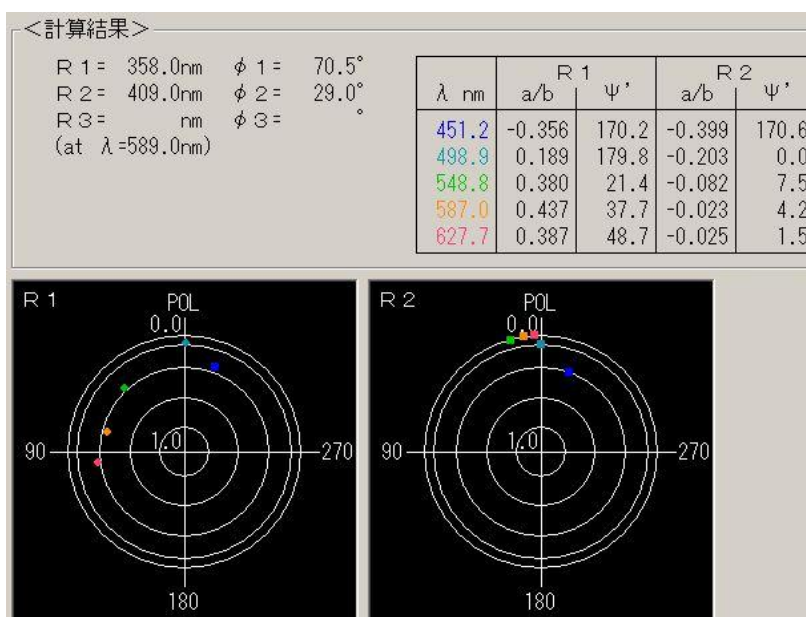
R1 の範囲	340	380	1
R2 の範囲	380	420	1
1 の範囲	0	90	1
2 の範囲	0	90	1
最適化条件	//入射直線偏光		

できるだけ で得られた Re の数値に近い位相差板を 2 枚準備します。

仮に、R1=358nm,R2=409nm の PC フィルムを使用するとして、再度 LCD-OPTIMA で

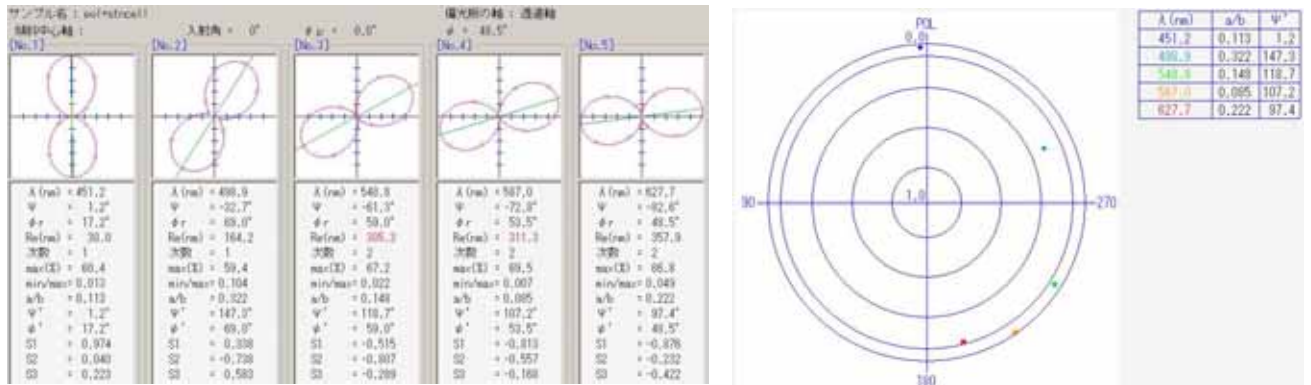
1, 2 の計算範囲を設定して計算を実行します。その結果、  $\phi_1=70.5^\circ$ ,

$\phi_2=29^\circ$  が得られました。



実際に で測定した偏光板+STN 切の上に、pc358 と pc409 とをそれぞれの遅相軸が の計算結果の 1, 2 の方位になるように置いたものについて、PR ソフトのメニュー-1.楕円偏光板測定を使用して楕円偏光状態を測定します。その結果は、LCD-OPTIMA の計算結果に近い偏光状態になっていることがわかります。

### 偏光板+STN 切の測定結果



### 偏光板+STN 切+pc358+pc409 の測定結果

